様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　30 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007-2008
課題番号：19520020
研究課題名（和文）　アリストテレスの基礎的語彙の受容過程およびその邦訳の再検討

研究課題名（英文）　A reconsideration of the reception of Aristotle's philosophy in West and in Japan: with a proposal for a new translation of Aristotle's basic concepts

研究代表者
中畑　正志　(NAKAHATA MASASHI
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号 60192671

研究成果の概要：アリストテレスの哲学の基礎的語彙の多くは、「可能と現実」「実体」などのように、現在では哲学の基礎概念となっているばかりでなく日常用語にまで浸透している。そうした語彙をアリストテレスがどのような意図で提示し、またその後西欧においてどのように継承され受容されてきたのかを改めてたどり直すとともに、19 世紀の西欧における支配的な解釈の影響下にある日本における受容と翻訳のあり方をその問題点を確認し、あらたな翻訳の可能性を検討した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	1,300.000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：アリストテレス　基礎概念　受容史　翻訳

１．研究開始当初の背景
アリストテレス哲学の基礎的語彙の多くが哲学の基本概念として使用されているが、そこに至るまでには、西欧においても、アリストテレス哲学の内的な力だけでなく、文化状況などの要因が複合的に働いていた。また日本においては西洋哲学の輸入が主として１９世紀末であったため、それらの概念の邦語訳はその時点での支配的解釈の影響下にある。この二つの受容過程について未だ十分な解明はなされていない。また現在の邦訳語は、以上の解明を踏まえて。再検討される必要があると考えられる。

２．研究の目的
(1)アリストテレス哲学の基礎的語彙について、アリストテレス自身の理解を精密に確認した上で、その後の受容と変容のプロセスを、とりわけ西洋古代の中期から後期、そして中世に重点を置いて追跡する。
(2)(1)の追跡結果を踏まえながら、さらに、日本におけるアリストテレス哲学の受容のあり方を確認しつつ、基本的な語彙に対する従来の訳語の問題点を検討し、いっそう正確でわかりやすい新たな邦訳語の可能性を考える。

3. 研究の方法
研究代表者の中畑と研究分担者内山は、それぞれこの研究課題に関連するいくつかの研究を行ってきた。本研究はその成果を踏まえて、アリストテレスの基礎的な語彙のいくつかについて、次のような研究を遂行し、基礎的語彙に対する従来よりも正確な理解を得るとともに、その後の変容の経緯を明らかにする。

(1)アリストテレスの著作における用法を、プラトンをはじめとする先行する思想家との関係を考慮しながら確認し、現在の諸解釈を批判的に検討する。

(2)アリストテレス以後の継承と変容の過程を、古代中期および後期と中世スコラ期を中心に検討する。

(3)日本での受容のあり方をその邦語訳を中心に考察する。

(4)以上の研究成果を十分踏まえた上で、新たな邦訳語の探究と提案を試みる。

4. 研究成果

研究代表者の中畑は、つぎのような研究成果を得た。

(1) アリストテレス哲学を支える基礎的な語彙について、その理解全般に関わる理論的考察を行なった。そのひとつは、能動と受容という語彙の適用をめぐる問題であるが、次のような成果を得た。――アリストテレスにおいては、心的事象を理解する上で「作用する」＝「能動」と「作用を受ける」＝「受動」という対比的カテゴリーが基本的な視座を提供しており、心的事象は全般的に「受動的」な活動と理解されている。この「能動」と「受動」という対比については、もともと物理的事象間の関係を表す言葉を心的事象に対して類比的に比喩として用いたものだという（デカルトが主張したような）理解が現在でも有力である。しかしアリストテレスにおいては、この二つの言葉の源泉である「作用する」「作用を受ける」という用語は、むしろ魂（心）のはたらきを身体を含めた自然全体の探究のなかに位置づけながら理解するための重要な概念として機能しており、むしろ魂のはたらきについてこそ文字通りの意味で適用・理解されている。このことは、基礎的な語彙についても、個別的な意味の変遷の背景に、それを理解するためのより一般的な思考の枠組みが歴史的におおきく変貌していることに注意する必要を告げるものである。

(2) アリストテレスの哲学の受容過程については、まずアリストテレス哲学を継承したペリパトス派の哲学における受容と変容について次のように考察した。――ペリパトス派の哲学は従来「哲学上の昏睡状態」のように低く評価されたが、そこでは論理学や魂論などについて重要ないくつものの哲学的成果とアリストテレスの思想の変容が認められる。しかしより本格的な研究のためには、著作断片の校訂などの基礎作業がいぜんとして必要である。

(3) 紀元前後のアリストテレス哲学の復興の歴史的プロセスを次のように具体的に解明した。――アリストテレス哲学の復興については、哲学活動がアテナイ中心から分散化したこと、著作家のテキスト自体への関心が増大したこと、教説の体系化への志向が強まったことなどの、前1世紀から後3世紀までの哲学的動向全体が深く関係している。さらにアリストテレス哲学の復興については、従来尊重されてきたアリストテレスのテキストの受容に関わるストラボンとプルタルコスによる説明は、多くの問題を含みそのまま受け入れることはできない。さらに、著作集の編纂に携わったアンドロニコスの役割については、従来の支配的な解釈のようにあまりに大きな評価を与えることには歴史的に十分な証拠はないが、しかしJ.Barnes のように極端な懐疑主義をとる必要はなく、いくつかの重要な功績を期すことは可能である。

(4) アリストテレス哲学の受容過程において、「注解」（コメンタリー）という著作形式が果たした役割を次のように考察した。その萌芽は、紀元前1世紀に見られるが、確立のためにはアプロディシアスのアレクサンドロスが大きな役割を果たした。アレクサンドロス以後、この注解というスタイルが支配的になるが、しかしそれは新プラトン主義のいくつかの想定に影響されており、必ずしもアリストテレスの精確な理解を目指したものとは言えない。したがって「エネルゲイア」などのいくつかの基礎的な語彙についても理解の変容が見られる。

また研究分担者の内山は、より広い文脈からこの課題を考察し、つぎのような研究成果を得た。

(5) 古代における哲学的思考の独自性を検討しし、それがこんにちの「哲学」や「学問」よりもより柔軟な知であることを指摘した。また他方でアリストテレスとそれ以後の制度化のプロセスを展望した。

(6) アリストテレスがプラトンとともに重要な哲学者として受けとめられるようになるのは、新プラトン主義の成立以後のことであり、したがってこの二人を中心とする現代の古代哲学史観は、プラトンやアリストテレスに続く時代の哲学者たちの意識とは異なることを明らかにした。

さらに以上の全体的な確認にもとづいて、中畑と内山はアリストテレスの基礎的な語彙について、具体的に、より正確な理解の確認と適切な邦訳の検討をおこなった。その成果は次のようなものである。

(7) 現在のアリストテレス哲学の基礎的語彙の邦訳は、日本において西洋哲学の受容がおこなわれた19世紀という時点での西欧のアリストテレスの解釈と翻訳に大きく依存している。そしてその西欧の解釈は、すでに以上確認されたような、アリストテレス哲学の受容と変容のプロセスの結果成立したものである。したがってアリストテレスの基本的語彙の現在の邦訳は、アリストテレスからは何重にも隔たっており、アリストテレスの込めた意味を適切に表していない場合が少なくない確認される。

そのような例は多いが、たとえば、アリストテレスの哲学全体を支えるきわめて重要な語彙である「ウーシアー」ousiaという言葉は、現在では「実体」と訳されている。しかしもともとのギリシア語は、「～がある」という「存在」の意味だけでなく「～である」という同一性や述定をも意味する動詞「エイナイ」einai から形成された名詞で、したがって「ある」という意味を中核としている。しかしそれが古代後期において hypostasis というギリシア語といわば癒着したかたちで理解され、さらに、字義通りには後者のギリシア語の訳語にふさわしい substantia というラテン語が前者の訳語として使用されるようになる。Ousia の近代語訳の、substance, Substanz などはこのラテン語を継承したものであり、その日本語訳の「実体」は、まずはこれらの近代語の訳語である。そのため、そこには「ある」という概念との関係という最も重要な概念理解を示唆する要素がまったく見て取ることができない。アリストテレスの基本的語彙について、同様の例はいくつも確認できる。

以上のような事情を踏まえて、より分かりやすく精確な訳語を考案することを試みた。検討された語彙は多いが、まだ暫定的である(もちろん訳語は文脈に依存する場合があるので、完全に訳語を統一することは、かえって理解を妨げる場合があることにも注意しなければならない)。その一例を挙げなら、

hyle:「質料」→「素材」
ousia:「実体」→「本質的ありかた」「基本存在」
energeia:「現実態」→「活動状態」「活動実現状態」

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

内山勝利、「知の制度化を超える力」、『世界思想』第 36 号、査読無、2009 年、9-13 頁

内山勝利、「変貌する哲学史――ギリシア哲学世界から見えてくるもの」、『岩波講座 哲学』14 巻、査読無、2009 年、3-27 頁

中畑正志、「展望 形而上学は現在する」、『岩波講座 哲学』2 巻、査読無、2008 年、1-19 頁

中畑正志、「名づける、喩える、書き換える」、『岩波講座 哲学』1 巻、査読無、2008 年、3-29 頁

内山勝利、「英知と学知との間――古代ギリシア哲学が求めたもの」、東京外国語大学 AA 研究所『総合人間学叢書』4 巻、査読無、2008 年、61-66 頁

中畑正志、「テオプラストスと初期ペリパトス派」、『哲学の歴史』1 巻、査読無、2008 年、645-664 頁

中畑正志、「プラトン哲学・アリストテレス哲学の復興」、『哲学の歴史』2 巻、査読無、2007 年、467-491 頁

〔学会発表〕(計 1件)

内山勝利、「かたちと色――プラトン『ティマイオス』の周辺」、京都哲学会、2008 年 11 月 3 日、京都大学

〔図書〕(計 5 件)

中畑正志、京都大学学術出版会、『プラトン哲学入門』、2008 年、462 頁

内山勝利、中央公論新社、『哲学と哲学史』2008 年、173-182 頁

内山勝利、中畑正志、中央公論新社、『哲学の歴史 第1巻』、2008 年、742 頁

内山勝利、中畑正志、中央公論新社、『哲学の歴史 第2巻』、2007 年、670 頁

中畑正志、岩波書店、『プラトン』(J,アナス著)、2008 年、139-154 頁

〔産業財産権〕
○出願状況 (計 0 件)

なし

○取得状況（計　０件）

なし

〔その他〕

なし

６．研究組織
(1)研究代表者
中畑　正志（NAKAHATA MASASHI）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60192671

(2)研究分担者
内山勝利（UCHIYAMA KATSUTOSHI）
京都大学・大学院文学研究科・名誉教授
研究者番号：80098102

(3)連携研究者
なし